講演要旨 ニダバ (*Nidaba*) 39(2010), 165-173

印欧アナトリア諸語の研究の現状と課題

―ルウィ諸語を中心として―

大城光正

1．はじめに

ドイツのアッシリア学者 Hugo Winckler が、かつてのヒッタイト王国の都であったハットゥサ(Hattuša、現在の Boğazkale、学術上の呼称は当時の地名 Boğazköy を使用)で、一万にのぼる大量のヒッタイト楔形文字粘土板を発掘したのは 1906 年のことである。そしてその後の発掘調査によって、3 万枚以上の楔形文字粘土板文書が出土している。これらの 90 パーセント以上はヒッタイト語(Hit. 16-13 BC)で書かれた粘土板文書で占められ、残りがパラー語(16-15 BC)、楔形文字ルウィ語(CLuw. 14-13 BC)、シュメール語、アッカド語、ハッティ語、フルリ語の文書である。これらの言語のなかで、印欧語族アナトリア語派に属する言語が、ヒッタイト語、パラー語、楔形文字ルウィ語であり、さらに同語派に属する言語としては、当地で発祥した独特のアナトリア象形文字で刻まれた碑文言語である象形文字ルウィ語(Hluw. 10-8 BC)、ギリシア系アルファベットで刻まれたリュディア語(Lyd. 5-4 BC)、リュキア語(Lyc. 5-4 BC)、ミリア語(Mil. 5 BC)、カリア語(Car. 7-3 BC)、シデ語(Sid. 5-3 BC)、ピシディア語(Pis. 2-3 AD)が含まれる[1)]。

次に、印欧アナトリア諸語の下位区分としては、ヒッタイト語、パラー語、リュディア語の各言語と、残りの楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、ミリア語をルウィ諸語として包括する説がある[2)]。 つまり、ルウィ語群に含まれる各言語はルウィ祖語からの分岐を推知させるほどの緊密な親縁性が指摘されてきた。通時的には、楔形文字ルウィ語の言語的改新が象形文字ルウィ語に在証されたり、ミリア語に散見される言語的特徴がリュキア語に言語的改新形として在証されている。しかし、リュキア語にはこれらのルウィ語系の言語には確証されないリュキア語特有の言語的改新も後述のように確認されている。 つまり、リュキア語もヒッタイト語、パラー語、リュディア語に比肩しうるアナトリア諸語の一言語を示唆しているが、このような特徴をもって、同語がルウィ語とは完全に独立した一分派を形成しているとも言えない。そこで、アナトリア高原の南部または南西部を占めていた楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、ミリア語の言語にカリア語、シデ語、ピシディア語を加えて、ルウィ諸語(Luwic)と呼称されるのが一般的である[3)]。 ただし、留意すべきこととして、この呼称はアナトリア語派内の推定されるル

ウィ祖語からこれら7言語がそれぞれ分岐発達したということではなく、あくまでも方言地理的な領域で相互の言語的影響によって共通の言語的特徴を共有するに至った言語グループと理解すべきであろう。

2．印欧語研究におけるヒッタイト語の貢献

上述のように、1906年にWinclerによるBoğazköyの発掘後の1917年に、チェコのBedřich Hrozný による“ヒッタイト語は印欧語族に属する言語である”ことを決定づけた書物(Die Sprache der Hethiter)が出版されて、当時の学界では、ヒッタイト民族の言語であるヒッタイト語が注目を浴びることになった。そしてその後のヒッタイト語研究は堅実な研究成果を積み重ね、印欧語比較研究に多大な貢献をしたことは否定できない。特にヒッタイト語は紀元前16世紀から13世紀に至る時代の使用言語であり、印欧諸語の中でも古層の言語的特徴が散見される。その中でも代表的なものとしては、喉音(laryngeal)の保存と古層の印欧語的な語形変化が挙げられる[4)]。ヒッタイト語における喉音の保存はhの文字で表記される音である。当時の学界では、同音はヒッタイト語にのみ保持される音で、他の印欧諸語ではすでに消失した音と推察された。特に、F. de Saussure(1879)がソナント的音素Aとして純粋理論的に再建した印欧語根の位置にヒッタイト語の同音(h)が表出されることから、ヒッタイト語の古層の言語的証拠が注目を浴びることになった：例えば、青年文法学派の再建形/ソシュールの再建形/ヒッタイト語形：“圧倒する”*ter(ə)-/*terA-/tarh-；“輝く・明るい”*arĝ-/*Aerĝ-/harg-；“前に”*ant-/*Aent-/hant-(ギリシア語 ἀντί/ラテン語 ante)；“守る”*pās/*peAs-/pahs-；“恐れる”*nā-/*neA-/nah-。喉音理論では、一般に$*h_1*h_2*h_3$と表記して、$*h_2$と$*h_3$は母音の音色を*aと*oに変える：$*h_1e>*h_1e>*e$；$*h_2e>*h_2a>*a$；$*h_3e>*h_3o>*o$。また、音節末音の位置にある喉音はヒッタイト語以外の印欧諸語では喉音の消失にともなって代償延長が生起する：$*eh_1>*eh_1>*ē$；$*eh_2>*ah_2>*ā$；$*eh_3>*oh_3>*ō$。喉音理論とヒッタイト語の在証は印欧諸言語に散見される不可解な音韻的な現象の説明に重要な役割を果たした[5)]。しかし、ヒッタイト語におけるこの古層の言語的特徴の保存にもかかわらず、名詞の性における男性と女性を区別しない共通性と中性、法における直説法と命令法、未完了・アオリスト・完了などの欠落と時制における現在形と過去形に代表される単純な体系は非常に特異な形態と言える。そこで、このような単純化された特徴は後代に蒙った言語的改新と見做すよりもむしろ、より一層古い言語的特徴の保存と見做すインド‐ヒッタイト説(Indo-Hittite Hypothesis)が提唱されるに至った[6)]。つまり、ヒッタイト語は他の印欧諸語よりも遥か早期に共通祖語(Proto-Indo-Hittite)から分岐して、サンスクリット、ギリシア語、ラテン語などの共通の祖先である印欧祖語(Proto-Indo-European)と姉妹語の関係にあるという仮説であるが、ヒッタイト語と他のいくつもの印欧諸語の間に固有の言語的特徴が多く存在するというこ

とからも、ヒッタイト語はあくまでも他の言語と同じレベルに位置づけられるべき印欧諸語の一言語と理解すべきである。

3．ルウィ諸語(Luwic)の研究の現状

インド・ヒッタイト説の提唱のみならず、ヒッタイト語が印欧語比較研究に与えた衝撃と貢献は想像以上に大きなものであったと推察される。特に、ヒッタイト語の在証に基づく印欧祖語構築に関する指摘は従来の印欧比較言語学研究を根本的に見直すきっかけを作ったと言っても過言ではない。とはいえ、ヒッタイト語の発見をきっかけにして、ヒッタイト語と同系の印欧アナトリア諸語の解明も進展を見せており、現在では、ヒッタイト語を含む印欧アナトリア諸語の証拠が従来にも増して印欧語比較研究に大きく貢献しているのが現状であろう。以下において、特に進展めざましいルウィ諸語の研究とその注目点を概観してみたいと思う。

(1) カラベル(Karabel)の岩壁碑文

ヘロドトスの『歴史』(巻2)に、現在の Karabel の岩壁に王の彫像とともに“われはこの地を、わが肩によりて得たり”という意味のエジプト聖刻文字の碑銘の存在が記されてある。ロンドン大学の J. D. Hawkins などの最近の研究によれば、同碑銘は紀元前 1400～1300 年頃にアナトリア西部を占めていたルウィ系民族のミラ国の王 Tarkasnawa が作成したもので、ミラ国は後にヒッタイト王 Mursili II によって平定されてヒッタイト王国の支配下に入った勢力と推察されている。Hawkins による岩壁碑文 KARABEL A の考察によれば、弓と槍を手にする王の浮彫り像とともに、以下のヒッタイト象形文字が浮彫りされている:

象形文字部分: REX TARKASNA-wa/i REX mi+ra/i-a
AVIS$_x$-li? REX mi+ra/i-a REGIO [INFANS]
[....] REX mi+ra/i-a REGIO NEPOS

日本語訳: “タルカスナワ、ミラ<国>の王
ミラ国の王、.....の息子
ミラ国の王、.....の孫“

また、同王名は、以下の翻字のように、「タルコンデーモスの印章」として有名な印章の王名とも同定されている[7)]。

楔形文字部分: ^{m}Tar-kas-sa-na-wa LUGAL KUR ^{URU}Me-ra-a
象形文字部分: (REX)Tarkasna-wà/ì Mi+ra/i-a(REGIO)
日本語訳: “ミラ国の王、タルカスナワ”

つまり、ルウィ系民族の勢力範囲がカラベルやミラ国のようなアナトリア高原の西部にまで及んでいたということは、ルウィ系民族の早期の同地域への進出が推知される[8)]。

(2) リュキア人とリュキア語研究

ホメーロスの叙事詩『イーリアス』のなかのは、リュキア人がトロイに味方してギリシア軍と戦ったという記述がある。また、ヘロドトスの『歴史』(巻1) にも、リュキア人に関する記述が見られる。同民族は紀元前5〜4世紀にかけてアナトリアのエーゲ海域の南西部にリュキア王国を築いた。さらに、同民族はヒッタイト王国時代にアナトリア西部を占めていたルッカ国(Lukka/Luqqa)の民族の末裔とも推察されている[9]。ただし、言語的には紀元前5−4世紀のリュキア語の言語資料しか現存していないので、ヒッタイト王国時代のルッカの言語的様相は不明である。なお、リュキア語のルウィ諸語、およびアナトリア語派内の言語的位置については、特に、リュキア語の名詞共通性複数主格語尾形-i(PIE.<*-es: Hit./Pal.-es、CLuw.-nzi、HLuw.-(n)zi、Mil.-z)、名詞複数属格語尾形-e(PIE.<*-om: Hit.-an、Lyd.-av ; CLuw./HLuw.所属形容詞形成辞-assi-)、複数与・位格語尾形-e(PIE.<*-os:Hit./Pal.-as : CLuw.-nz、HLuw. -(n)z)の特徴がリュキア語のルウィ祖語(Pre-Luwian)からの継承形、または改新形というよりもアナトリア祖語からのリュキア語独自の言語的改新形を示唆している。それ故、リュキア語はルウィ諸語の共通の言語的改新を保有すると同時に、アナトリア祖語から継承したヒッタイト語と共通の特徴も保有する特異な言語的位置を示唆している[10]。また、リュキア語がミリア語より後期の言語的改新を提示する特徴としては、ミリア語 t-/リュキア語 k-(Mil.tbi「他の」/Lyc.kbi <*twi-<PIE.*dwi-)、ミリア語-s-/リュキア語-h-(所有形容詞形成辞Mil.-esi-/Lyc.-ehi-)が挙げられる。なお、印欧アナトリア諸語の中で最古層の言語資料を提供するヒッタイト語研究が1906年の発掘のおかげで急速に進展したが、印欧アナトリア諸語の中で最初に研究された言語はリュキア語の研究であった。言語資料がギリシア系アルファベットで記述されていたということが幸いしたのであろう。すでに、1811年にはリュキア語碑文が発見され、E.Kalinkaによる貴重なリュキア語碑文資料の公刊は1901年のことである[11]。

(3) 旧約聖書のヘト人

旧約聖書には、民族名称の一つとして、“ヘト(人)”と呼称される民族名が認められる。ただし、同名称は統一的な意味で引用されているものではない。ヘト(人)がカナン地方の一先住民として列挙されている(創10:15;15:20;出3:8,17;13:5;23:23,28;ヨシュ9:1等)。しかしながら、王下(7:6-7)の記述では、アラム軍が戦車の音、ウマの音、大軍の音を聞いて、「見よ、イスラエルの王が我々を攻めるために、ヘト人の諸王やエジプトの諸王を買収したのだ」と言って恐れおののく様子が記述されていることから、ヘト人はエジプトと比肩されうる勢力と見做されていたようである。このヘト人の王たちが占めていた地域はシリアの北部地域で、この地域はヒッタイト王国の滅亡(1200BC頃)後に、ルウィ系の民族がいくつもの小都市国家を築いて新ヒッタイト文化を花開かせ、多くの象形文字ルウィ語碑文を残した場所でもある[12]。 つまり、旧約聖書の“ヘト(人)”の記述には、パレステ

ィナ地域に定住するセム系の一カナン先住民としてのヘト人と、北シリア方面において新ヒッタイト文化を形成したルウィ系民族、またはその末裔を示すヘト人が二重語彙的に混用されているようである。この旧約聖書のヘト人に関する研究も、ヒッタイト王国の都が発掘され、ヒッタイト語と同系のルウィ語の研究が進展するにつれて、旧約聖書に見られるヘト人の民族像も徐々に明らかになっている。

(4) トロイの言語はルウィ語？

1986 年に C. Watkins はトロイ人の言語をルウィ語系の言語であると推定した。つまり、ヒッタイト語文書に散見される Wilusa 国の王 Alakusandus をギリシアの(W)ilios とその王 Alexandros に同定するというものである。Ilios はトロイの地であり、すでにヒッタイト語文書にトロイとその王が確認されていることになる。そこで、その国の言語はどのような言語を使用していたかが問題になったのである。Watkins はヒッタイト語文書(KBo IV 11, 45-46)に挿入された楔形文字ルウィ語を以下のように解釈する：

(Hit.)　EGIR-*ŠU* ^{d}Suwasunan ekuzi

(CLuw.)　ahha-ta-ta alati awienta wilusati

[Hit.]　「あとで(EGIR-*ŠU*)、彼がスワスナ神に(^{d}Suwasunan)祝杯をあげる(ekuzi)、[そして彼らは(次のようにルウィ語で)歌う]」

[CLuw.]　「“彼らが(-ata)険しい(alati)ウィルサ(国)から(wilusati)やってきた(awienta)ときに(ahha)・・・・・“」

上記のルウィ語文は、alati(形容詞 ala/i-「険しい」の単数奪格)、awienta(動詞 awi-「来る」の 3 人称複数過去)、wilusati(地名 Wilusa-の単数奪格、ただし地名を明示する決定詞 URU の欠落)と解釈する。alati wilusati はホメーロスの表現 **Fiλιος αἰπεινή**「険しい Ilios」に同定させるものである。また、Watkins は上記のルウィ語の語順(動詞は文末)の破格を 7 音節の押韻の不完全行(ahha-ta-ta alati | awi(e)nta wilusati)と解釈している。彼は証拠が僅少ゆえに慎重な表現ではあるが、トロイの地域の言語をルウィ語系の一言語が使用されていたものと推知している[13]。

(5) カリア語研究

カリア人に関する記述は、ホメーロスの『イーリアス』に同民族は南西アナトリア（北のリュディアと南のリュキアの中間地域）に住んでいたことや、ヘロドトスの『歴史』では、印欧アナトリア民族のリュディア人とも同系民族であり、傭兵としてエジプトに移住したとも記されている。そして、これらの記述に合致するかのように、大半のカリア語碑文はアナトリアの同地域やエジプトから発見されている。ヒッタイト王国時代の資料に散見されるアナトリア南西部の一勢力の Karkisa、または Karkiya に対応させる説もある。アナトリア地域の歴史的背景や当時の言語分布等からカリア語の印欧アナトリア語派への

帰属が推定されてきたが、最近の言語学的な考察、特にカリア語研究の第一人者のI. J. Adiego(345)の指摘“Several traits can be observed that clearly place Carian within the Indo-European Anatolian family of languages. More precisely, some of these traits situate Carian in the family of so-called Luwic dialects.”からも、カリア語の同語派のルウィ諸語の一言語であることが推察される[14]。以下において、カリアの固有名詞の証拠も含めて同語のルウィ諸語への帰属を示唆する言語的特徴を例示してみたいと思う。

ルウィ諸語に特徴的な印欧祖語の無声硬口蓋閉鎖音*k の摩擦化がカリア語にも見られる：カリア語指示代名詞 s(a)-「これ」；楔形文字ルウィ語/象形文字ルウィ語 za-：ヒッタイト語 ka-。また、ルウィ語に特徴的な印欧祖語*g の消失もカリア語(i)ßr-、楔形文字ルウィ語 im(ma)ri-「野」、ヒッタイト語 gim(ma)ra- 確認される。さらにカリア語の民族明示の接尾辞-yn-/-ýn-は楔形文字ルウィ語 -wanni-、象形文字ルウィ語 -wani-、リュキア語 -ñni-、ミリア語 -wñni-と対応する形式である。形態的な特徴としては、ルウィ諸語に共通の特徴である i 母音化(i-mutation)がカリア語にも確認される：カリア語 ted-“父”(<*tedi-<*tadi-)；楔形文字ルウィ語 tati-、象形文字ルウィ語 tati-、リュキア語 tedi-：ヒッタイト語 atta-、リュディア語 taada-[15]。さらに、カリア語の所有形容詞要素-ś はルウィ諸語に共通の同要素(*-assi-)の継承形(uksmu lkorś「Lkor の(息子)、Uksmu」)と見做される(つまり、カリア語-ś<*-ss-)：楔形文字ルウィ語/象形文字ルウィ語-as(s)i-；リュキア語-ehi-；ミリア語-esi-。カリア語名詞共通性複数対格-š は*-ns の継承形で楔形文字ルウィ語-inz、象形文字ルウィ語*-i(n)z、リュキア語-is、ミリア語-iz。また、断片的な証拠ながら、カリア語の分詞形成要素-m-はルウィ語に共通の分詞形成辞-mi-(楔形文字ルウィ語-mmi-、象形文字ルウィ語-mi-、リュキア語*-mi-、ミリア語-mi-)との対応を示唆している。僅少の語彙の対応として、カリア語 en「母」：楔形文字ルウィ語 anni-、リュキア語 eni-、ヒッタイト語 anna-、リュディア語 ena-；カリア語 mso-「神」：楔形文字ルウィ語 massani-、リュキア語 maha(na)-、ミリア語 masa-、シデ語 maśara(複数与格形)；カリア語 trq(u)d-「タルフント嵐神」：楔形文字ルウィ語 Tarhunt-、象形文字ルウィ語 TONITRUS-hut-(*Tarhu(n)t-)、リュキア語 Trqqñt-、ヒッタイト語 Tarhu-；カリア語 sb「そして」、ミリア語 sebe (リュキア語 se)。

(6) シデ語研究とピシディア語研究[16]

シデ(Side)はアナトリア南部のリュキアの東に位置する Pamphylia 地方の都市で、シデ語の言語資料は、同地より発見された 3 BC 頃作成の 6 つの献納碑文と 5-4 BC 頃作成の貨幣に刻まれたモノグラム(monogram)に限られる。それ故、同語の詳細な系統的な考察は不可能であるが、断片的な言語資料より言えることは、同言語のアナトリア語派のルウィ語系との深い関係が示唆されるのが、シデ語の所有要素の-s をルウィ諸語に共通の所有形容

詞形成要素(*-assi-)の継承形と考える:シデ語 poloniw pordors「(A)porrodoros の(息子)、(A)pollonius」: cf. CLuw./HLuw. -as(s)i- ; Lyc. -a/ehi- ; Mil. -a/esi- ; Car. -ś。

また、ピシディアは上記の Pamphylia の北に位置し、同地方で発見されるピシディア語の資料は2−3世紀頃の30余りの墓碑銘で、大半はその墓地の所有者名と父祖名である。それ故、同語の詳細な系統的な考察は不可能であるが、上記のシデ語と同様に、ピシディア語の所有要素の-s(<*-ss-)とルウィ諸語に特有の*-assi-との同定によるルウィ諸語との関係が示唆される:ピシディア語 Musita Tas 「Ta の(息子)、Musita」。

上述の(5)(6)におけるカリア語、シデ語、ピシディア語の概要において、断片的な言語的特徴ではあるが、それらの言語的特徴がルウィ諸語の特徴を共有している度合いが強いことと、また、これらの言語が使用されていた地域の当時の言語状況も勘案して、これら3言語もルウィ語グループ(Luwic)に所属する言語と推察されている[17]。

注

1) 大城・吉田(1990);その他の言語では、アッカド語がセム語族に属する言語で、残りのシュメール語、ハッティ語、フルリ語は現在のところ系統関係が不明である。

2) カリア語、シデ語、ピシディア語は資料が僅少のために、現時点では、いくつかの断片的な言語的特徴からこれら3言語も同様に印欧アナトリア語派に属する言語と考えられる(詳細は後述)。

3) 南アナトリア諸語(Ivanov (2001))、南西アナトリア諸語(Melchert(2002))参考。なお、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語の「ルウィ語」には Luwian(または、アメリカ東部の研究者 Luvian)が使用されるが、アナトリア語派のルウィ諸語の英語名称としては、両言語に使用される Luwian との混同を避けるために、**Luwic** の使用を提案する:cf. Turkish「トルコ語」: Turkic「チュルク語」。

4) ヒッタイト語の語彙の大半は語源不詳である:Bird(1982)による Pokorny(1969)の印欧語の語源辞書の引用語彙2044語の中でヒッタイト語に保存されている語彙数は155語彙(約7.6%)。それはヒッタイト語文献の中で宗教的な祭祀文書で占められているために、出典語彙の著しい表出上の偏りによるものである。ただし、ヒッタイト語のコアな語彙の75%は印欧祖語に遡る印欧語彙という指摘もある:Melchert(1995:2152):At least 75 percent of the core vocabulary is based on inherited Indo-European material.

5) 吉田(2005:21-23)。

6) 最近の Indo-Hittite 説に関しては Drews(2001)参照。

7) Hawkins(1998);Hawkins/Morpurgo-Davies(1998)。

8) すでに古期(紀元前16世紀頃)に編纂されたヒッタイト法典には、ヒッタイト王国の北部を占める Palā とともに、同王国の西部・南部を占める地域勢力として Luiya、中期ヒッタイト時代以降は同

王国の対抗勢力としてArzawa(諸勢力の集合名称)の名称に代わる。

9) ルッカ国(Lukka)はある一つの国名、民族名というよりも、アルツァワ国のような同系民族の集合体と見做される。ギリシア語資料ではΛυκια、後にTrmmis(Lukka国のAttarimmaの都市名に由来？)。

10) 特に、Melchert(2002:267-270)参照。

11) Kalinkaの資料も含めてその他のリュキア語の資料に関しては、Bryce(1986:42-45)、およびLang(2003)参照のこと。

12) 網羅的な碑文集としてHawkins(2000).

13) Arbeitman(1985);Watkins(1986:58-59);Güterbock(1986:33-44).

14) 従来のカリア語研究史については、大城(1990); Melchert(1995:2157-58;2003:175-177;2004a) Adiego(2007:345-347: "Carian as an Indo-European Anatolian language.")

15) カリア語ted-はi母音化後(*tadi-)のi母音消失に伴う先行語幹母音*-a->-e-への母音変異形。

16) シデ語のNeumann、ピシディア語のBrixheの指摘、および、Melchert(1995:2157-58)を参照。

17) さらに、印欧祖語に遡ることが可能な語彙で、ルウィ諸語に確認される語彙を例示しておきたい。なお、本稿ではルウィ諸語とヒッタイト語との比較を示すために、アナトリア諸語以外の印欧諸言語の語彙（例えば、サンスクリット、ギリシア語、ラテン語等）は紙面の都合上省略するのでPokorny参考のこと: CLuw.wasu-"良い", HLuw.wasu-, Hit.assu- (<*wesu- Pok.1174); CLuw.titaimi-"乳児", Lyc.tideimi"子供", Hit.DUMU-as (<*dhē- Pok.241); HLuw.tuwatri-"姉妹", Lyc.kbatra, Hit.DUMU.SAL-as (<*dhughəter Pok.277); CLuw.du(p)pi-"打つ", HLuw.tupi-, Lyc.tub(e)i-, Hit.walh- (<*(s)teup-Pok.1034); HLuw.wawa-"牡牛"; Lyc.wawa-, Hit.GUD-us (<*gʷou- Pok.482); CLuw.hawi-"羊", HLuw.hawi-, Lyc.xawa-, Hit.UDU-us (<*owi-Pok.784); CLuw.tapassa-"天", HLuw.tipas, Hit.nepis (<*tep- Pok.1069); CLuw.ura-"偉大な", HLuw.ura-, Hit.salli- (<*wer- Pok.1165); 数詞に関しては、HLuw.tuwi-"2", Mil.tbi, Lyc.kbi (<*dwi-Pok.228); HLuw.tari-"3" (<*tri-Pok.1090); HLuw.nu-"9" (<*newosPok.769)、さらに、リュキア語の数詞と思われる語形kbisñtāta"20", aitāta"8", nuñtāta"9" (Oshiro(1988); Eichner(1992:29-96);Melchert(2004b)参照.

参考文献

Adiego,I.J.(2007) *The Carian Language*, Leiden.

Arbeitman,Y.L.(1985) "Trojan, Luwian and the Mass Media", *Diachronica* III/2, 283-91.

Bird,N.(1982) *The Distribution of Indo-European Root Morphemes*, Wiesbaden.

Brixhe,C.(1988) "La langue des inscriptions épichoriques de Pisidie", *Gs.B.Schwartz*, Louvain, 131-155

Bryce,T.(1986) *The Lycians I*, Copenhagen.

Drews,R.(2001) *Greater Anatolia and the Indo-Hittite Language Family*, Washington.

Eichner,H.(1992) "Anatolian", *Indo-European Numerals*, Berlin, 29-96.

Hawkins,J.D. (1998) "Tarkasnawa King of Mira", *AnSt* 48, 1-31.

---------, (2000) *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions Vol.1*, Berlin/New York.

Hawkins,J.D., Morpurgo Davies,A. (1998) "Of Donkeys,Mules and Tarkondemos", *Fs. C.Watkins*, Innsbruck, 243-260.

Güterbock,H.G.(1986) "Troy in Hittite Texts? Wilusa, Ahhiyawa, and Hittite History", *Troy and the Trojan War*, Bryn Mawr, 33-44.

Ivanov,V.V. (2001) "Southern Anatolian and Northern Anatolian As Separate Indo-EuropeanDialects and Anatolian As a Late Linguistic Zone", *Greater Anatolia and the Indo-Hittite Language Family*,Washington,131-183.

Kalinka,E.(1901) *Tituli Asiae Minoris:Tituli Lyciae lingua Lycia conscripti*, Vienna.

Lang,G.(2003) *Lykisch: Eine systematische Zusammenfassung*, St.Peter am Hart.

Melchert,C.(1993) *Cuneiform Luvian Lexicon*, Chapel Hill.

---------, (1995) "Indo-European Languages of Anatolia", *Civilizations of the Ancient Near East Vol.IV*, New York, 2151-2159.

---------,(2002) "The Dialectal Position of Lycian and Lydian within Anatolian", *Licia e Lidia prima dell'ellenizzazione*. (Roma,1999), Roma,265-272.

---------,(2003) *The Luwians*, Leiden.

---------,(2004a) "Carian", R.D.Woodard(ed.), *The Cambridge Encyclopedia of the World's Ancient Languages*, Cambridge, 609-613.

---------,(2004b) *A Dictionary of the Lycian Language*, Ann Arbor.

Neumann,G.(1978) "Die Sidetische Schrift", *ASNP III,VIII/3*, 871-886.

Oshiro,T. (1988) "Some Luwian Words of Indo-European Origin", *Orient* 24, 47-54.

大城光正 (1990) 「カリアの文字と言語」『オリエント学論集』(刀水書房) 73-92.

大城光正・吉田和彦, (1990) 『印欧アナトリア諸語概説』大学書林.

Pokorny,J.(1969) *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch*, Bern.

吉田和彦, (2005) 『比較言語学の視点』大修館書店.

Watkins,C.(1986) "The Language of the Trojans", *Troy and the Trojan War*, Bryn Mawr, 45-62.